

大溝藩の城下町、近江高島を巡る

企画・案内：西川 勝

開催日：令和5年10月1日（日）

集合：JR 高槻駅改札外 午前8：50

（現地の場合：JR 湖西線 近江高島駅前 午前10時）

※ JR 高槻駅発 9：01（近江今津行き） 近江高島駅着 9：54

【行程】 歩行距離 約9 km

—午前— 約3.5 km

JR 近江高島駅 → ①近藤重蔵の墓 → ②古式水道（タチアガリ）→ ③武家屋敷跡→ ④大溝陣屋総門 → ⑤勝安寺 → ⑥町割り水路 → ⑦四高桜の碑 → ⑧勝野津（大溝港） → ⑨大溝城跡 → ⑩乙女ヶ池（昼食）

—午後— 約5.5 km

⑩ 乙女ヶ池 → ⑪鵜川四十八体石仏群 → ⑫白髭神社 → JR 近江高島駅

（備考）

- ・ トイレは、近江高島駅、乙女ヶ池太鼓橋付近、白髭神社ほか。
- ・ 午後は、乙女ヶ池から白髭神社まで歩きますが、途中、石仏群への緩い坂道を登ります。白髭神社からJR 近江高島駅までの歩行時間は約40分。大阪方面行き電車は、新快速「網干行き」 近江高島発 15：20 → 高槻着 16：12



「町割り水路」（中町通り）



白髭神社鳥居

関西歴史散歩の会

代表 久野洋人

携帯 090-1583-9781

交通ルールを守りましょう。事故災害について、当会は一切責任を負いません。

○ 高島地域

高島市は、人口約4万人、面積は琵琶湖（面積669.26km²）を上回る693.05km²、県内の市町村中最大。平成17年（2005）、マキノ・今津・安曇川・高島・朽木の5町1村が合併し高島市が誕生。

今回、歴史散歩の対象とした高島（大溝）地域は、比良山地が琵琶湖にせり出す「明神岬」辺りから国道161号線に沿って北へ鴨川流域平野の南端にかけての地域で、湖岸には打下^{うちおろしはま}浜の砂州により琵琶湖と隔てられた内湖の「乙女ヶ池」が南北に延びている。

乙女ヶ池の北西には、戦国時代から江戸時代にかけて織田信澄（天正6年（1578）入部）や分部光信（元和5年（1619）入封）によって築城整備された大溝の城下町（陣屋町）が広がっていた。

古代からこの地は、畿内と若狭・北陸地方を結ぶ官道北陸道（西近江路）が通り、湖上交通の拠点「勝野津（大溝湊）」と合わせ交通の要衝として繁栄。

昭和2年（1927）には浜大津と近江今津を結ぶ江若鉄道が開通（昭和47年（1972）廃線）。昭和49年（1974）にはJR湖西線が開通。

① 近藤重蔵の墓（墓所は、分部家の墓所である圓光^{えんこうぜんじ}禅寺の塔頭「瑞雪禅院」）

明和8年（1771）～分政12年（1829）。江戸駒込の生れ。父は御先手組与力。重蔵は通称、諱は守重。国後・択捉島や蝦夷地の探検者として有名。著書に「清俗紀聞」、「辺要分界図考」、「外蕃通書」など多数。寛政10年（1798）から文化4年（1807）まで五度にわたり北方を探検。択捉島に最上徳内とともに「大日本恵登呂府」の標柱を立てる。分政9年（1826）、長男の富蔵が殺傷事件を犯したことにより近藤家は改易。重蔵は家事不取締で近江国高島郡大溝藩分部家預かりとなる。晩年の2年有余をこの地で過ごす。この間、近江の植物誌である「江州本草」を著す。

② 古式水道（タチアガリ）

大溝城下では、地下水に鉄分が多く含まれるため井戸水の利用ができない地域があったことから、新たに水を確保する方法として「古式水道」という水道システムが整備された（江戸時代初期）。このシステムは、城下から離れた水源地から竹樋を何本も繋いで水道管とし、要所にサイフォンの原理を利用した「タチアガリ」と呼ばれる溜枳（分水施設）を設けて、ここを拠点に各戸に配水するというもの。竹樋と竹樋の繋ぎには「マクラ」と呼ばれる松の木の角材が使われた（現在、水道管は塩化ビニール管）。水源には2系統あり、ひとつは日吉山山麓から出る山水（日吉山水道組合が管理）、もうひとつは集落から数百メートル離れた場所に湧く「生水^{しょうず}」と呼ばれる湧水（勝野井戸組合が管理）。

古式水道が残る街並みや乙女ヶ池・打下集落の景観が水を巧みに利用して生活や生業を営むことによって形成されたとして、平成27年（2015）、「大溝の水辺景観」が文化庁による「重要文化的景観」に指定される。

③ 武家屋敷跡（笠井家）

建物は、主屋桁行7間半、梁間5間、茅葺で19世紀頃のものと思われる。

屋敷跡の案内板によると、「この辺り一帯は譜代家臣の集住する武家屋敷地となった。明治維新後家臣の多くが大溝を離れたため、今その遺構を見ることはむづかしいが、笠井家は現在残る数少ない1軒である。通りに面して、両袖に部屋のある長屋門があったが、大正の初めに玄関脇に移築改造され、今もその面影を残している。ほぼ藩政時代の代表的な家屋とすることができる。」と記載されている。

④ 大溝陣屋総門

江戸時代に入り、分部光信が伊勢国上野から大溝藩へ家臣45名を伴って入封。その後12代、250年にわたり大溝を領し、明治維新を迎える。大溝藩は2万石という小藩であったことから、光信は天守を再建せず旧大溝城の三の丸跡に陣屋（居宅・政庁、「郭内」と呼称）を置いた。陣屋の西方に武家地（「惣郭」と呼称、外堀で囲む）。武家地東端の北側には町人地を配置。惣郭は東西4町余（約440m）、南北2町余の地域を占め、東西に北町・中町・南町の3本の通り、南北には東町通りが設けられた。惣郭には、総門・西ノ門・南門・会所門という門を配し、武家地内外の出入りを制限。総門は、武家屋敷地の正門で、桁行約17.8m、梁間約3.9mの長屋門。屋根は入母屋造の棧瓦葺、中央部に扉口。大溝陣屋関連で唯一現存する建物。

⑤ 勝安寺

浄土真宗本願寺派の寺。織田信澄の大溝入りの際に安曇川の田中郷から移されたとされている。本堂は、信澄の書院を拝領したものと伝えられている。2世住持の妻・感は浅井三姉妹の従姉妹にあたり、後に水戸藩祖・頼房の乳母となったといわれている。

⑥ 町割り水路

町人地は武家地と直交する方向の南北に長い地区で、町屋は間口が狭く奥行の長い短冊形の屋敷地として整備され、西から石垣町・西町・中町・本町の4本の通りが設けられた。これらの通りの中央には幅、深さともに約1mの水路が配置され、生活用水や防火用水に供されていた。これが「町割り水路」である。本町通りの水路は現在暗渠になっているが、他の3本は現存する。

水源は、西・中・本町については北の小田川から、石垣町については水田からの用水が引き込まれていたとされている。

その後、町の発展に伴い、天保元年（1830）頃、数軒から十数軒が「井戸仲間」となって、共同で「生水」の湧水地に元井戸を掘り、そこから地下に埋設した管路で引水することが始まった。

現在では、井戸仲間を4つの「吐出槽組合」に集約して配水されている。

町人町の「本町通り」には、近世の北国街道（西近江路）が通っている。

⑦ 四高桜の碑

萩の浜に「四校桜」と刻まれた石碑がたっている。この石碑は、昭和16年(1941)4月6日に発生した、旧制第四高等学校(現在の金沢大学)ボート部員らの遭難を悼んで建立されたもの。

当時、四校はボート競技の名門校で、この年もインターハイの連続制覇をめざして、3月下旬から瀬田川で訓練。その仕上げとして、京大のボートにOBをまじえた11人が乗り込んで、二泊三日の予定で大津から今津までの往還遠漕中の帰路に、萩の浜沖合1.5kmの地点で比良山系からの吹雪まじりの突風により遭難、全員が死亡。

⑧ 勝野津(大溝湊)

勝野津は、古代以来、湖上水運の港津として知られており、大津、今津とともに湖西三大港といわれ、湖西航路の中継点として重要な港であった。「延喜式」が示す若狭国からの「運漕雑物功賃」の公定ルートでは、陸路を勝野津に運び、ここから湖上を大津に向かう行程を計上。大津上陸後は、京へ陸路で運送。 ※ 延喜式は、平安時代中期に編纂された格式(律令の施行規則)で、三大格式(弘仁、貞観、延喜)の一つ

明治以降大溝港は、大津等湖畔各港との間で太湖汽船による定期船が運航され賑わったが、鉄道の開通後、次第にさびれ、現在は、漁港となっている。 ※ 太湖汽船(現在の琵琶湖汽船)は明治15年(1882)に設立。

⑨ 大溝城跡

大溝城は、高島郡支配の拠点として、天正6年(1578)、織田信長が甥にあたる織田信澄に命じて築城されたもので、縄張り明智光秀によるものとされている。

大溝に城を構えた理由として、この地は西近江路が通る交通の要所であったことや、勝野津と呼ばれる港があったことから、織田信長の安土城、羽柴秀吉の長浜城、明智光秀の坂本城などとともに琵琶湖に面して築かれた水城を湖上ネットワークで結ぶことにより、琵琶湖の制海権が掌握できるとみられたことによる。

乙女ヶ池北端の西側には、東西約25m、南北約30mの「野面積み」による石垣で囲まれた本丸跡が残っており、本丸跡北西部の乙女ヶ池北西端付近には港湾施設の一部も確認されている。

残された古絵図と発掘調査結果によると、天守台の南側には二の丸跡、西側には三の丸跡があったと推定されている。大溝城は、乙女ヶ池を天然の外堀とし、水路で大溝湊と結びつけることにより、琵琶湖の舟運を巧みに利用する構造になっていた。

その後、天正10年(1582)の本能寺の変に際し、織田信澄は明智光秀の娘を妻としていたことから嫌疑をかけられ大阪城で自害。以後、城主は丹羽長秀、加藤光泰、生駒親正、京極高次(正室は、浅井三姉妹の次女「初」)等と頻繁に代わり、天正13年(1585)から大溝城は取り壊され、その部材は甲賀郡の水口岡山城に移されたとされている(慶長8年(1603)廃城との説もあり)。

⑩ 乙女ヶ池

琵琶湖は、周囲から大小 400 以上の河川が流入しており、これらの河川がもたらす土砂によって湖岸付近に砂州や砂堆が形成され、内陸側に内湖と呼ばれる小さな湖水（潟湖）がいくつも付属しているのが特徴。「乙女ヶ池」もその一つで、面積 8.6ha、平均水深 1.6m、東西約 150m、南北約 600m の細長い内湖。近辺の内湖として、鴨川河口の「松ノ木内湖」等。

表の湖（琵琶湖）に対して、ウラウミ、セドウミ（セド＝背戸）。万葉の時代には「香取の海」、「洞海」、「鬼江」とも呼ばれ、昭和になって淡水真珠の養殖が行われるようになってから現在の「乙女ヶ池」と称されるようになった。

古代には、乙女ヶ池周辺一帯は「壬申の乱」（672 年）や「藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱」（764 年）で戦場となった。

【藤原仲麻呂の乱】

藤原仲麻呂は藤原鎌足のひ孫にあたり大師（太政大臣）として政権を握っていたが、孝謙上皇が寵愛する僧・道鏡と対立し、天平宝字 8 年（764）に反乱。仲麻呂一行は、息子「辛加知」が守（長官）を務める越前国府を目指して北陸道を北へ向かったが、官軍に阻まれ、やむなく北陸道を「高島郡三尾埼」まで引き返したところ、「勝野の鬼江」（乙女ヶ池付近）で斬られたとされている（「続日本記」に記載）。

⑪ 鶴川四十八体石仏群

滋賀県の史跡に指定されている鶴川四十八体石仏群は、「近江輿地志略」等の記述によると、天文 22 年（1553 年）に対岸の観音寺城の城主であった六角（佐々木）義賢が、亡き母の菩提を弔うため、観音寺城からみて西方浄土に当たるこの地に建立したとされていたが、近年の研究では、これよりも時代が少し遡るのではないかと考えられている。石仏は、定印を結んだ阿弥陀如来坐像で花崗岩製。当初、四十八体あった石仏は、江戸時代の初めに十三体が大津市坂本の慈眼堂（天海僧正の廟所）に移され、さらに近年、二体が何者かによって持ち去られたため現在、三十三体しか残っていない。

⑫ 白髭神社

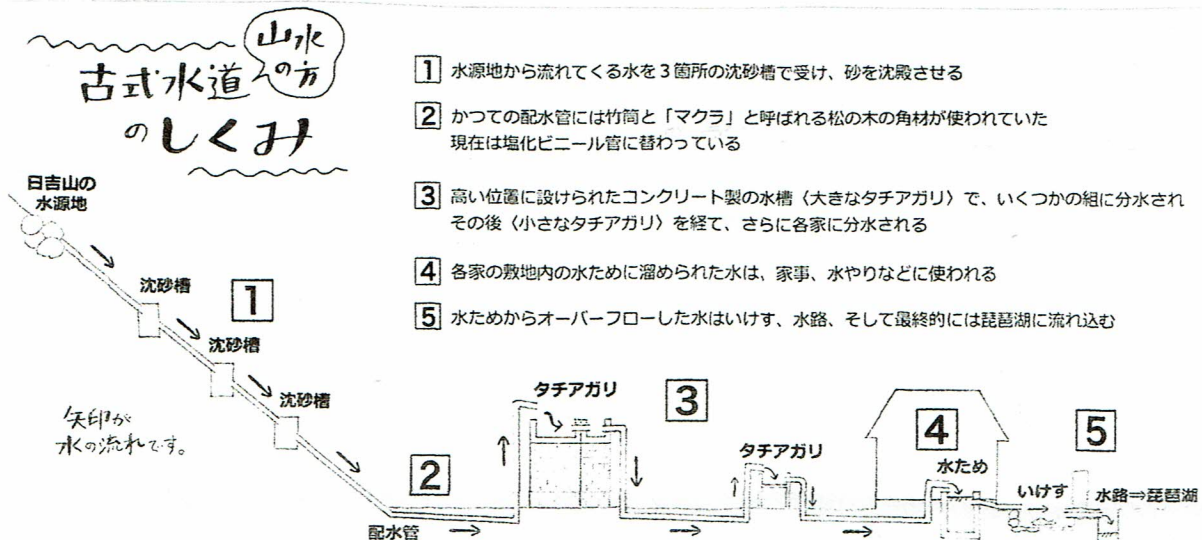
社伝では、垂仁天皇 25 年に倭姫命によって社殿が建てられたとされ、猿田彦命を祭神とするが、本来は、背後の比良山系に座す比良明神を祭神としたと考えられている。本殿（国重文）は慶長 8 年（1603）、豊臣秀頼が片桐勝元を奉行として造営。拝殿は、寛永元年（1624）、大溝藩主分部光信の造営。湖中の鳥居は、古くからあったという伝承があるが、現在のものは、昭和 12 年（1937）、大阪道修町の薬問屋・小西久兵衛が建立したものを昭和 56 年（1981）に新築・移転したもの。

【参考文献等】

- ・ 滋賀県の歴史散歩（山川出版社）
- ・ 滋賀県の歴史（山川出版社）
- ・ 近江から日本史を読み直す（講談社）
- ・ 琵琶湖 水辺の文化的景観（平凡社）
- ・ 歩いて楽しむ近江琵琶湖若狭（JTB パブリッシング）
- ・ 近江高島 大溝の水辺散歩（大溝の水辺景観まちづくり協議会）
- ・ 活動広報紙「おおみぞこみぞつうしん」（大溝の水辺景観まちづくり協議会）
- ・ 関西の公共事業・土木遺産探訪「古式水道が生きる町のまちおこし（高島市勝野地区）」〈第3集〉（北斗書房）
- ・ 高島市ホームページ

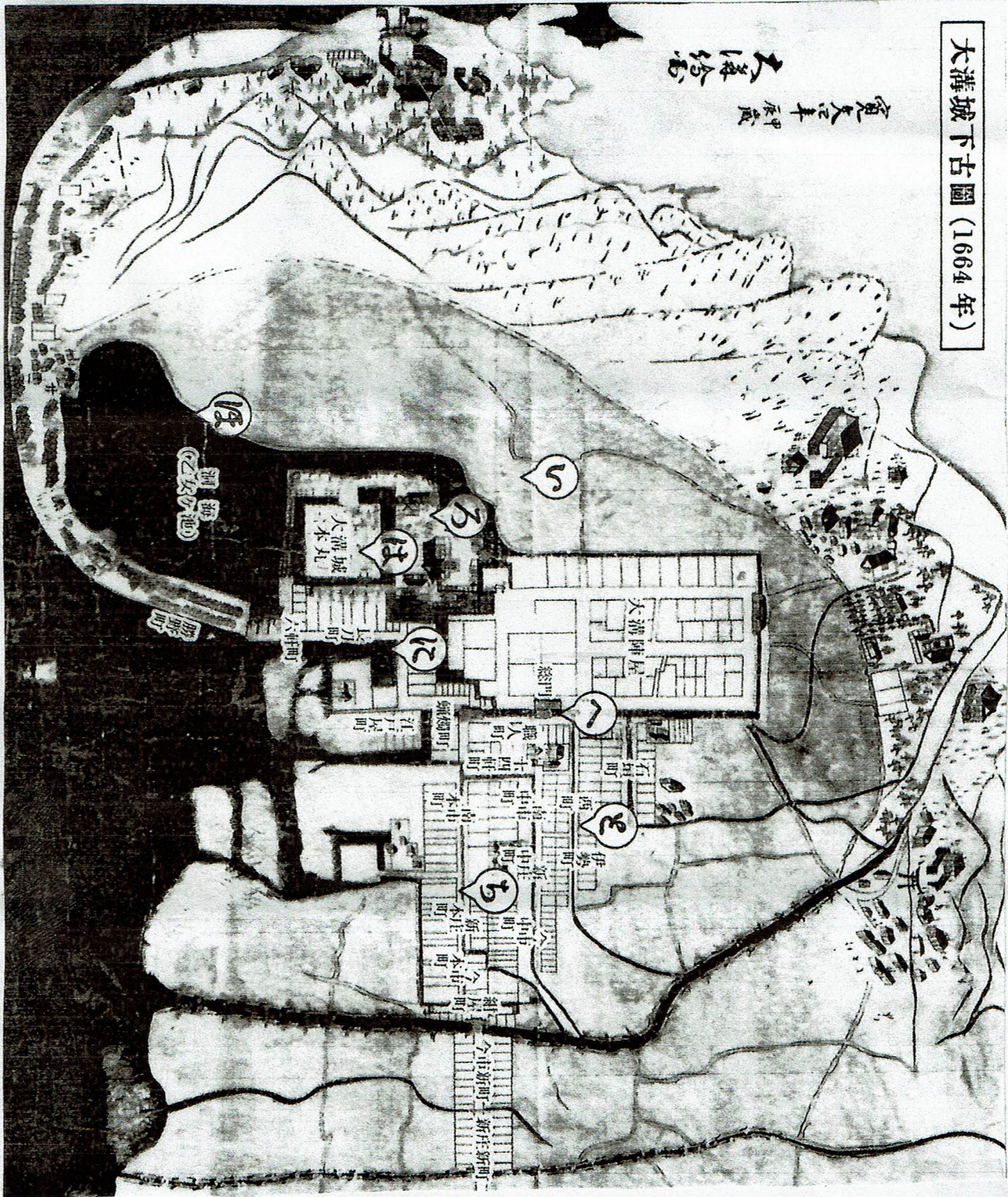
〈参考資料〉

「古式水道」の仕組み

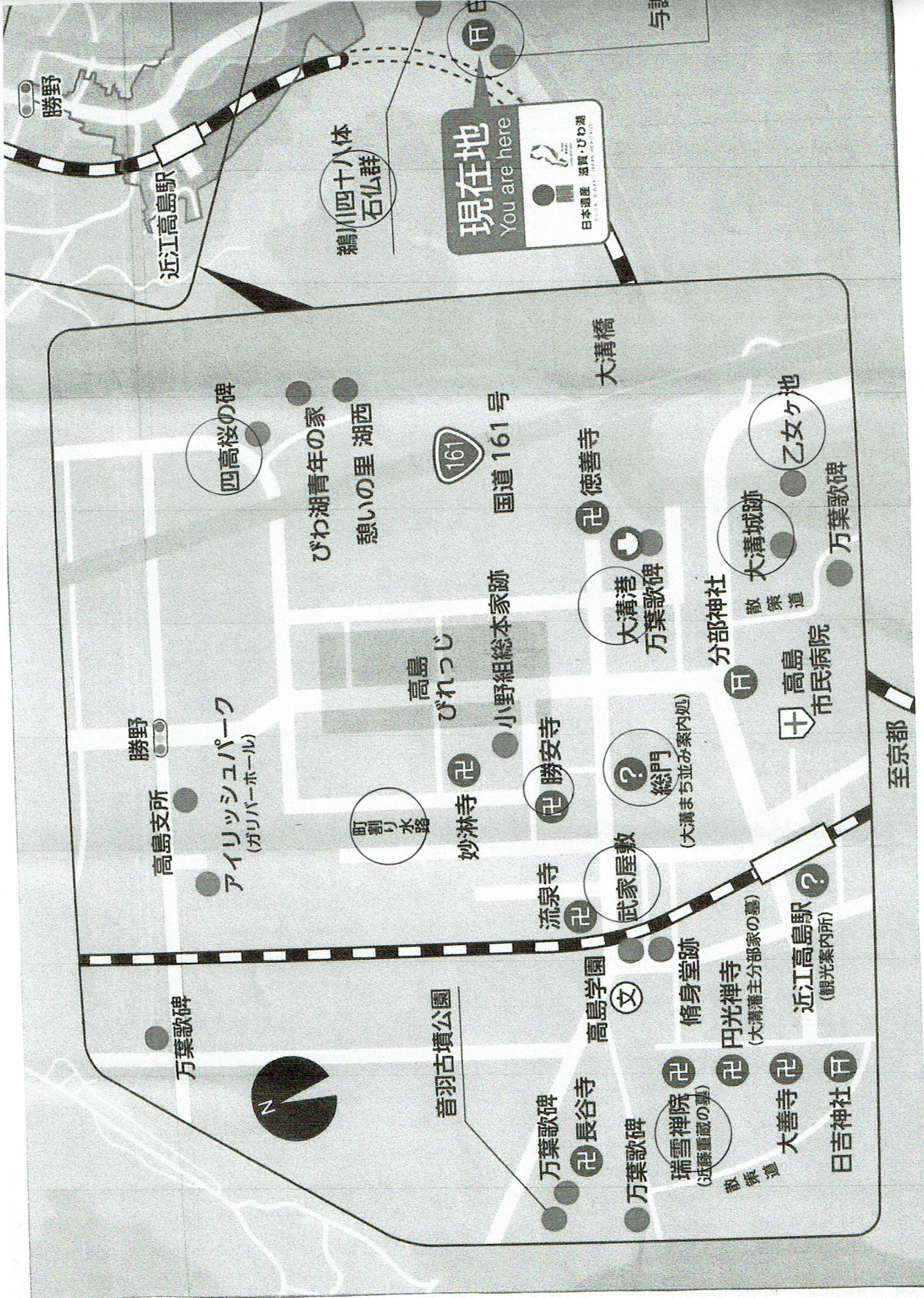


「大溝の水辺景観まちづくり協議会」資料による。

大溝城下町古図 (1664 年)



「大溝の水辺景観まちづくり協議会」資料による。



現在地
You are here

日本通産 経済・ひわ湖
TAKAHASHI

鵜飼四十八体
石仏群

近江高島駅

勝野

高島支所

アイリッシュパーク
(ガリバーホール)

万葉歌碑

音羽古墳公園

万葉歌碑

長谷寺

万葉歌碑

瑞雪禅院
(武藤重蔵の墓)

円光禅寺
(大溝藩主分家家の墓)

大善寺

日吉神社

近江高島駅
(観光案内所)

高島学園

脩身堂跡

流泉寺

武家屋敷

総門
(大溝まち並み案内処)

勝安寺

妙林寺

小野組総本家跡

徳善寺

大溝港
万葉歌碑

分部神社

大溝城跡

乙女ヶ地

万葉歌碑

高島
市民病院

至京都

大溝橋

国道 161 号

161

びわ湖青年の家

憩いの里 湖西

四高桜の碑